
かほくがた

河北潟湖沼研究所通信 Vol.12 No.1



河北潟干拓地土地改良区の職員の方々とともに実施した水路調査の様子

河北潟干拓地が平成18年度農地・水・環境保全向上対策モデル地区に選定されたのを契機として、河北潟湖沼研究所もこの活動に参加することになりました。

河北潟湖沼研究所が担当する分野は、干拓地の生物の生息状況について調べることです。とくに、畑や農業用水路を生物がどのように利用しているか、ということを中心に調べることとなりました。中央排水路や支線排水路をくまなく歩き、水生生物の確認をすること、また、干拓地の中にできた水田を水鳥などがどのように利用するかとい

うことを調べることになっております。これまで2回の調査をおこない、干拓地の支線排水路について、今まで調べられていなかった新しいデータを得ることができました。ドジョウやモツゴ、メダカ、トウヨシノボリ、トノサマガエルやヒメタニシなど生きものがたくさんみられる水路、ほとんど生きものがいない水路、同じように見える環境でも微妙な違いがあるのか、水路によって生物相が大きく異なっていました。現在、調査途中ですので、いずれ調査結果をまとめてご報告する機会があるものと思います。

連載 河北潟の仲間たち

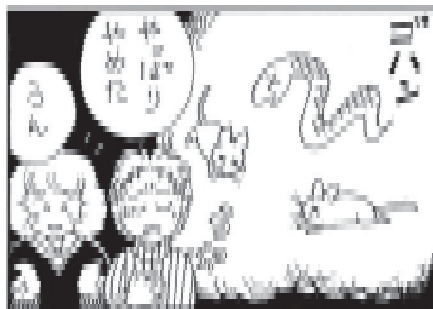
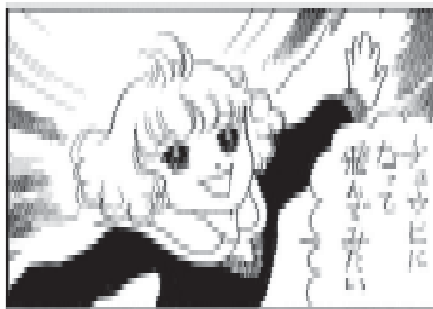
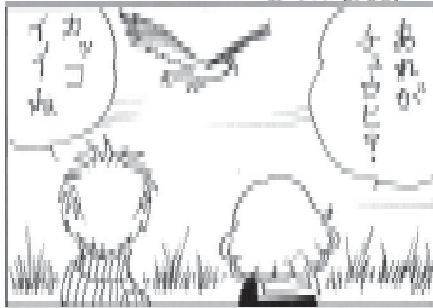
第1回 チュウヒ

チュウヒは、草原に棲む猛禽類（もうきんるい：タカやフクロウの仲間）です。チュウヒは、もともと河北潟にいた鳥でなく、干拓後に新しく河北潟の仲間となった鳥のようです。

河北潟でのチュウヒの繁殖が最初に確認されたのは1974年です。そのころの河北潟は、干拓地の干陸が完了していましたが、まだ農地の整備が進んでおらず、広大なヨシの草原が広がっていました。おそらく新しい住みかを求めて彷徨っていたチュウヒが、この場所を見つけ、自分のすみかとしたのだと思います。

この河北潟での繁殖の確認は、本州での最初のチュウヒの繁殖の確認でした。平地の広い草原を好むチュウヒには、開発の進んだ本州の平野はもともと、あまり住みやすい場所ではないようです。現在、日本で繁殖が確認されている場所としては、北海道にいくつかの湿原がありますが、本州では、三重県の本巣市干拓地などわずかの場所に限られています。栃木県の渡瀬遊水池はチュウヒの冬季の飛来地としてよく知られていますが、現在は繁殖はしていないようです。毎年3月中旬に行なわれている一斉の火入れが、繁殖できない原因となっている可能性が指摘されています。かつて繁殖が確認されていた八郎潟でも、現在では、チュウヒは繁殖していないようです。河北潟は現在でも繁殖が続いており、本州での最も重要なチュウヒの繁殖地の一つとなっています。

河北潟は、最近大きく様相を変えつつあります。干拓地では農業が活気づき、訪れる人も増えました。湖面でのレジャー人口が増えています。人々が河北潟に関心をもち、河北潟との関わりを持つようになったことはすばらしいことです。今後、河北潟の環境問題にも注目する人が増え、河北潟の環境保全が進むことが期待されます。しかし同時に、チュウヒにとっては、河北潟のヨシ原が減り人が目立つことで、だんだんと住みにくい環境になってきたようです。



河北潟を気に入って住みつけた新しい仲間チュウヒが住み続けられるような環境を守りつつ、河北潟と人との関係も深めていくことが、河北潟が河北潟らしい特徴を保ちながら人々にとっても大切な場所となることに繋がると思います。河北潟を訪れた際には、ぜひチュウヒがどこかにいないか、探してみてください。ヨシ原の上にV字飛行の悠々とした姿を見かけることができるかも知れません。チュウヒがどんな姿をした鳥かということ、このニュースレターのタイトルの横に書かれている図です。（文：高橋 久 今後不定期掲載の予定）

50 回を迎えた河北潟自然観察会

1998年6月からはじまった河北潟自然観察会は、今年10月1日で第50回を迎えました。これは、おもに河北潟のみを対象とした自然観察会としては、他に例を見ないものです。毎回、少しずつテーマと観察地点を変えて河北潟の野生生物を観察してきたわけですが、同時に河北潟の移り変わりを観察することにもなりました。この6年間でも河北潟の自然環境は大きく変化しています。とくに自然観察に適した生物の豊かな水辺が少なくなってきました。タモ網を入れて遊べる水辺も少なくなったこともあり、水辺の観察の企画が少なくなり、野鳥を中心とする企画が多くなっています。シギやチドリが訪れていた水田も、近代的なほ場整備がすすめられ、最近では観察できる種類と数が減りつつあります。一方で、コンクリートの護岸を超えて侵入する外来植物のチクゴスズメノヒエや、野鳥ではアオサギやミサゴ、大陸から渡ってくるミヤマガラスなどは増えているようです。それでも、昔から河北潟の湖岸に生育してきたアサザが、保護の成果もあって、いくつかの水路でまとまった群落が確認されるようになっていたり、河北潟でしか出会うことができないであろう、希少な野鳥との出会いが少なからずあります。

観察会の初期の頃は、干拓地にあった生態系活用水質浄化施設を集合場所としており、



かつての舟入川の面影を残している馬渡川を観察（第47回観察会）



アサザの群落を観察（第50回観察会）

最初に水草を浮かべた池の中の生物と、そのとりに造成した水辺ビオトープの観察からはじめていました。また、新しく見つけた珍しい水草があると、皆でその水草を見に行ったりしました。最近はこの水辺公園を集合場所として、自動車での観察ポイントを見て回ることが多くなっています。参加者も少しずつ変わってきましたが、観察の内容も少しずつ変わってきました。

真冬の観察会に参加したポルトガルの留学生が凍え死にそうな顔をして参加していたり、夏の恒例のツバメのねぐら入りの観察会後のバーベキューで盛り上がり、明け方まで話し合っていたこともありました。生態学を研究する東京大学の学生さんたちが参加したときには、それぞれの専門分野から河北潟の生物を解説いただいたり、テレビ局の取材を受けたりなどのエピソードもありました。毎回の観察会では、河北潟を観察フィールドとする鳥類研究家の中川富男さんが現地案内をしてくださいます。中川さんはいつも河北潟を見て回っているため、いい場所をたくさんご存じで、大変内容の濃い観察会となっています。この場を借りて中川さんに深く感謝したいと思います。子供の頃参加してくれていた人が、今度は親子連れで参加できるよう、河北潟の自然と観察会が続いていくように皆様とともに活動していきたいと思えます。（主催者を代表して 高橋 久）

お知らせ

自然豊かな水辺を残そう～舟入川の保全プロジェクト～を実施します

車社会が発達するまで、もともと河北潟の周りには水路がたくさん流れ、舟が行き来していました。おもな交通手段として舟が使われていたのです。現在、多くの水路はコンクリートで固められ、かつての面影はほとんど残されていません。この馬渡川は、まだ土堀のまま残されている区間があり、かつての面影を残す貴重な水路です。しかし現状では、水路に枯れ草や泥がたまり、水が流れにくく、大雨の時には水があふれる危険もあります。

この手入れされていない水路を、よみがえらせることが今回の活動の背景です。まずは、この水路に生育する希少な水生植物のアサザを保全するために、近くに生育する外来植物のチクゴスズメノヒエをとりのぞきます。また可能な範囲で泥上げします。水路の側面が崩れているところには板などで補強します。作業の前後の水質の変化を見ます。この活動を通じて、河北潟の水路の保全また水生生物の保全の可能性をさぐります。

すでに第1回の作業は終了しました（結果は次号に掲載予定）。第2回、第3回の実施予定は、以下の通りです。

【実施日】

第2回 平成18年10月28日(日)

第3回 平成18年11月25日(日)

いずれも9:00～15:00

【集合場所】

こなん水辺公園駐車場(金沢市東蚊爪)

午前9:00までにお集まりください

【内 容】

集合後におもな活動地点に行き、草取りや泥上げ作業をおこないます。

【参加方法】

作業に参加される方は登録が必要となります。お手数ですが、河北潟湖沼研究所金



沢事務局までお申し込みください。

第51回河北潟自然観察会のお知らせ

以下の通り実施致します。

【実施日時】 平成18年12月3日 午前9:00～12:00

【集合場所】 こなん水辺公園駐車場

【内容】 自動車で移動して、冬鳥の飛来状況等を観察します。ワシタカ類の観察もおこなう予定です。

< 編集後記 >

今回は記事として掲載しておりませんが、かつて当研究所が実施した「河北潟自然学校」をリニューアルした講座を、2ヶ月に1回のペースで実施しています。第1回目は風力発電の現状と展望ということで、現在の風車の開発の状況や立地条件、代替エネルギーとしての問題点と展望について2名の方からご報告いただきました。次回は風車と自然環境との関係について実施する予

「かほくがた」 VOL.12 NO.1

2006年10月1日発行

発行所 河北潟湖沼研究所友の会

〒920-0051 金沢市二口町八58

河北潟湖沼研究所金沢事務局内

TEL:076-261-6951 FAX:076-265-3435